

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

東方默示録カイジ

【作者名】

さわやか

【あらすじ】

気が付けば……オレは森の中……
どこかわからぬ……
妖怪巣食つ幻想郷に來ていた……！

絶望の土地・幻想郷

「どうこう事だ……ハ雲紫……」

「あら？ 来たいと言つたのは貴方じゃ無くて？」

「確かに言つた……俺は行きたいと……幻想郷に……
だが俺は……森に行きたいとは言つてない……」

「幻想郷は土地の事なのよ、知らないの？」

「お前……騙したな……つ！」

「騙してないわよ。これから始まるのは賭けよ？……生きるか死ぬか
の。」

「な……つ！」

「ふふつ……人喰い妖怪がたくさん出るからね。気をつけなさい。」

「は……」

「ここは妖怪の住む場所なの。当然私も妖怪……」

(この女……とてもまともとは思えない……)
(おかしいのか……？頭……！)

「ちなみにもうここからは帰れないから。」

「じゃ、頑張つてねー」

「ま……待ちやがれ……！」

その瞬間……信じられない光景……

黒い裂け目が少女を飲み込む……

カイジの常識通用せず……!! 残念……!!

(なんてこつた……どこから間違えた……?)

(そもそもあんな誘いに乗ったのが悪かつたのか……?)

（回想）

「賭けが好きなの？ 責方」

「勿論だ……なにか知っているのか……？」

「知ってるわよ、とびきり面白いのをね」

「ぜひ……是非とも紹介してくれ……」

「ふふ、じゃあ早速行きましょうか……」

（回想終わり）

「あの女……ふざけやがって……!!」

その瞬間……カイジに思わず出来事……

「あなた、誰？」

金髪……赤い目……そしてなにより10歳にも満た無いその

外見 …!

「…? なんだお前 …! お前から名乗れよ …! まづ …!」

「わたしルーニア。あなたは?」

「ルーニア …! 僕は伊藤開司 …! カイジでいい …!』

「カイジは食べてもいい人類?』

唐突の出来事 …! カイジ大ピンチ …! 食人宣言 …!

「馬鹿野郎 …! 通るかそんなもん …! いい訳無いだろ …!』

「えー …! でもお腹すいたから、やっぱり食べちゃうね?』

ルーニア襲いかかる …! カイジそれを咄嗟に回避 …!

(本気かこいつ …! 正気とは思えねえ …!)

そして振り向き …! 全力Bダッシュ …! カイジ走るつ …!
命の危機 …!

「来るなつ …! 来るなあつ …!』

「までー!!』

「うわあああああああ!!』

…開司逃走中 …

「ハアツ …! ハアツ …! もう来ねえ …! 逃げ切ったか …!』

カイジ、命からがら脱出つ …!

「とりあえず安全な場所を …」

「あつ … 神社 … 神社があるぞ …!」

神社なら住職がいるはず … 仏に仕える人が化物な訳がない …

！ ありがとう … !! ありがとう仏様 … !!

「ちよつと！あんた誰よ！」

巫女現る … !! カイジ大勝利 … !!

「すまんつ … ! 今緊急事態だ … ! 困つてくれ … !!」

「ハア … ? あなた外来人？まあお賽銭くれるなら考えてもいいけど …」

「なるほど … 取引か … !! 面白いつ … !」

カイジ財布を開く … ! が！しかし … 野口が3人顔を覗かすだけつ … !

行けるのかつ … ! 行けるのかこれでつ … !

「すまないが所持金が今これしかない … ! 賴むつ … !!」

カイジ、渾身のトリプル野口つ … !!

「えつ … !? 3千円も!? ほ、ほんとにいいのよね!?」

「勿論だ … !! 足りなければ後日払う … お願いします … !!」

「や、やつた!! 早速入りなさい!!」

「あ、ありがてえ …!!」「ゾクッ

(あの女の金を見る田 ……この中のものとは思えなかつた ……)
(正に金は魔力 …!!)

「で？ あなた名前は？」

「伊藤開司 …カイジでいい ……」

「へー。私は博麗靈夢。どこから来たの？」

「ああ …酒屋で …紫とかいう女にハメられて …

「アイツもえげつない事するわね ……」

「本当に出られないのか ……?」
「からはず ……!」

「無理ね。一度ここに来たら、何か事故でもない限り出られないわ

「そつか …じゃあ妖怪が出るつてこののも …

「まあ、人間が少数派位には出るわね。」

「クソッ …俺はこれからどうすればいい ……?」

「そうね ……あなた悪人ではなさそうだし。今日は泊まつていきなさ

いよ。

「ありがてえ……」

感謝……！压倒的感謝……！

因果心報

あれから数日後……

カイジは神社に居候……

食つては寝食つては寝の寄生生活……

「ふはーっ……日本酒に焼き鳥つ……犯罪的うまさ……溶けそうだ……」

「……ねえ、そろそろ出でていってくれない?」

「馬鹿言えつ……外は妖怪だらけ……出でいくなんてアホの所業……! 鬼かつ……お前は……!」

「食費だつて安くないのよ? 私から言えばあんたが鬼だわ・ただでさえ収入が少ないので!」

「分つた……何かする……! 僕にできる」となら何でも……!

「そつは言つても、あなた家事も出来ないじゃない……出来る事なんであるの? ダメ人間の象徴ね」

貼り付けられるダメ人間のレッテル……
カイジ驚愕……

「そついえば、あなた、能力つて持つてたりしない?」

「能力……? 何だ……?」

「あら。知らないの? 外来人でも持つてる事があるつて聞いたことが

「あるけど……」

「知らねえつ……全く……身に覚えがねえ……」

「……兎に角、ここに住みたいなら家賃くらい払いなさい?」

「そんなこと言つても……何処で働けば良いんだよ……」

「私に聞かないでよ。や、出てつた出てつた!」

(あの野郎……何も知らない人間を外に放り出すだと……)
(鬼つ……まさに鬼畜つ……)

憤怒のダメ人間……

「とにかく職だ……仕事……生きるために……」

「しかしどうすれば……」

その時唐突に……又しても現れる黒い裂け目……

「随分と苦労しているよ!うね?」

「あつ……アンタは……」

「見させてもらつていたわよ?あなたの……ダメ人間つぱり!ふ
ふつ……」

吹き出す紫……鬼畜の所業……

「黙れクズ野郎……さつさと元に返せ……」

「貴方に言われたくはないわね……それに、帰れないって聞いてなかつたのかしら?」

「グッ……」

「まあ今日は馬鹿にしにきた訳じゃ無いわ。伝えるのを忘れていた事があつたの。」

「今更何だ……もしやまた悪条件を……!?」

「そんな事じゃないわよ。カイジ、あなたの能力についてよ。」

「能力……そういえば靈夢の野郎そんなことを言つっていた……」

「外來人は極稀に持つことがあるんだけど。運がいいのね、貴方」

「それで……何なんだよ!俺の能力……」

「貴方の能力は……『あらゆる賭けに勝つ』ができる程度の能力』

その時カイジに電流走る……

「な、何だそれ……!勝てるのか……?賭けに……必ず……!」

「そう言つ事じゃないかしら?」

「うひょーつ……やつたつ……最高の能力……億万長者も夢じゃない……!」

「ちなみに幻想郷で賭け事をする人は居ないわよ。人里にも殆ど。」

「は……？ 今お前なんて……」

「じゃあ、伝えたわね？ また会いましょう」

「おい馬鹿……詳しく述を……クソッ！」

カイジ……呆然と立ち尽くす……
あらゆる賭けに勝つことができる力……
意味なしつ……この世界では意味などない……

「そんなん……」グニャアア……

（数時間後）

（クソッ……探せど探せど……入っ子一人見当たらねえ……）

（暗くなつてきやがつた……まさか野宿……？こんな森の中であ……
絶対に無理……何故なら俺は文明人だから……）

（終わるのか……？俺の人生……妖怪に食われて……）

「……君、外来人かい？」

「ヒツ……何だお前……誰だよ……いきなり……」

「ああ、済まないね。私は森近霖之助、この近くで道具屋をやっている
者だ。君は？」

「俺は伊藤開司……カイジでいい……察しの通り外来人だ……」

「 そ う か 。 こ の 時 間 こ の 辺 は 危 ない 。 家 に 来 な い か ? 」

「 い い の か ？ ？」

「 勿 論 だ と も 。 丁 度 人 手 が 欲 し か つ た ん だ 。 」

「 ま さ か お 前 、 俺 を 食 つ た り し な い な ？ 」

「 失 礼 だ な 、 僕 を そ こ ら の 妖 怪 と 一 緒 に し な い で く れ 」

「 疑 つ て 悪 か つ た ？ 宜 し く 賴 む ！ 」

「 い あ う い も 、 宜 し く 。 」

カ イ ジ 、 道 具 屋 に 就 職 ？ ！

お め で と う ？ お め で と う ？ c o n g r a t u l a t i o n ？
！

逆転の糸口

「「」」が僕の道具屋、香霖堂だ。まあくつろこでくれ。」

「道具屋と呼ぶには……散らかりすぎじゃないのか……？」

「そこは一見すれば道具屋では無かつた……

例えるなら物置……！物が散乱する物置……整理不足……

「ううなんだ……僕も頭を悩ませていてね。それで、君には店の道具の整理を手伝つて欲しいんだ。」

「任せてくれ……！力仕事には自信がある……！」

「報酬と言つてはなんだが……しばらくなまむるといふ

「！」

「勿論嫌ならしいんだが、見たところ住む所にも困つてしまだ。余つてこむ部屋もある。どうだい？悪く話じやないと思つナビ。」

「……森之助……お前いい奴だな……喜んで住もう、いや住ませてくださー……！」

「そりかー！そりゃつてくれると思つたよ、これから直しく頼むよ。」

「今日はもう寝なさい。この空き部屋を使つとい。」

(なんて奴だ……見ず知らずの人を「」まで……まるで神様つ……！
「ありがとつ……）

だがしかし……霖之助の目的は別つ……労働など建前に過ぎない……カイジ氣づかず……

（開司就寝中）

「おはようございます……」

「おはよう、カイジ。疲れは取れた？」

「お陰様でばっちり……元気ハツラツだ……いつでも働けるぜ……！」

「いや、それはまだいいんだ……そこに座ってくれるかい？」

「……何かあるのか……？」

「まあゆづくり聞いてくれ」

「君は外の世界、つまりその、人間の世界から来たんだね？」

「？あ、ああ……まあな。」

「その――なんだ、外の世界の事を色々と、教えて欲しいんだ……いいかい？」

「勿論だ……教えてやるぞ……知りたい事なら何でも……」

「ほ、本当かい!? ありがとう!」

「でもどうして……知らないのか……外の世界……」

「ああ。本で知ることはあるが、行つたことは無くてね。ひどく興味

があるんだよ、僕は「

「なるほどじな … それで俺を助けたのか …」

「まあそんな所だよ … 実際外來人と話すのもこれが初めてでね。とても興奮している」

「悪い気分じゃないな …」

その後カイジは … 霖之助と夜まで語り合つた …

霖之助が道具の使用方法を聞き … カイジがそれに答える … 最高の関係 … ! 至福の一時 … !

「どうだい？ 外の物は全て集めてるんだ。」

「だがかなり古いな … いつの物だって感じのものもあるぞ …」

「やはり … 現代ではどんな物を使っているんだい？」

「そうだな … 便利な物 … 例えばこれとか …」

「なつ … 何だそれは!?」

「これはスマートフォンと言つてな … 簡単に言つと、写真機と電話とパソコンと音楽プレーヤー諸々が一緒になつた物なんだが …」

「な、なんて事だ … 神器じゃないか …！」

「いつもやって … 画面をなぞると動くんだ … とっても便利 …」

「す、すごい!! … 譲つてはくれないか？」

「悪いが簡単に譲る訳にはいかないっ……大事ですから……思い

出沢山……」

「そうか……そうか、分った、今日はありがとう。」

「結局……仕事してないな……」

「うん……ああ……気にしないでくれ……」

それから霖之助は毎日考えた……スマートフォンを手に入れる方法……！

手に入れたい……！

欲は人を狂わせると言つが妖怪人間もそれは同じ……
霖之助はもはやスマートフォンに魅了されていた……
恐るべき欲求……恐るべき林檎社……!!

（数日後）

「はー……よく寝た……」

「カイジ君!!!!!!!」

「な、何だ……!? 急に大声出して……」

「あ、いや、すまない……それより話がある」

（まさかクビ……？ まづい……今度こそ野宿生活に……）

「あれから僕は考えたんだ……君がどうしたらスマートフォンを、譲つ

てくれるか・・・それこそ寝ずに考えたわ・・・」

「ま、まあ・・・何を言つてこらんだ・・・何が目的だ・・・」

「そりやだ！カイジ、君がそれを譲ってくれるなら・・・僕は・・・君の幻想郷での必要最低限の生活の為、住宅を建てよう！」

「・・・はあっ!?お前・・・今本氣で言つてこらるのか・・・!?

「正に狂氣・・・ファアトレード概念など無無・・・！」

「もひひん本氣だ！あとほ君の承諾が問題なんだが・・・」

「も、勿論いいとも！最高だぜ！」

「そうか！あらがとう・・・本当に欲しかった・・・これが外の文明の力・・・！」

(ら、ラッキーッ!! 最高に・・・最高にツいてる・・・約一週間で・・・家を・・・夢のマイホームゲット・・・信じられねえ・・・)

交渉成立・・・シャークトレード・・・利害のみの一一致・・・

(夢か・・・いや違う・・・といひにこられは現実です・・・現実・・・)

（一週間後）

「カイジ、君の家が出来たそつだよ・・・」

「は・・・早すぎるだろう・・・いくらなんでも・・・ありえない・・・」

！」

「その手の第一人者に頼んだからね。まさかこれまでとは思わなかつたけど。」

「……霖之助……！今まで本当に世話になつた……！」

「お礼をしたいのはこいつの方だ。とても楽しかつたよ」

「また来るぜ……！達者で……！」

新築の自宅へと歩を進めるカイジ……！
だが本当の災難はこれからだった……！

「お前……俺の家の中で何してやがる……！」

念願の家

「これが俺の念願の……マイホーム……！」

カイジ感動……

まさか生涯で持つとは思わなかつた……マイホーム……

「お、お邪魔します……!!」

「お、カイジさん！いらっしゃーい！」

「……何だお前……何してやがる……俺の家の中で……！」

「あ！私河城ことじと申します！」の家の建築者です！以後お見知りおそれを～

カイジ、驚愕つ……!!

「いや……おかしいだろ……お前が建てられる訳がない……しかしも一週間で……常識だつ……！」

がつしじとした……建築士のイメージとは裏腹に……そこには年端もいかない……青い髪の少女が立つていた……

「失礼だなあ。それよりどつ？この家。外見もいいけど、内装もこだわったんだよねー」

確に家はまさに理想形……

内外共にシンプル、しかしどこか小洒落ている……

「だからこそおかしいんだ……女の子が一週間で建てられる家ではない……」

「あんまり河童の技術力をなめないでほしいなあ。」

「河童……!? お前河童なのか……!?」

「河童だよー、正真正銘の。」

「聞いた事がある……！ 河童……相撲が得意で……人間を溺れさせる……！ そして……」

「つまり……その……あれか……？ 僕の……尻子玉を取るとか……？」

「え!? キミ本当に尻子玉があると思つてるの!? キヤハハ!!」

「なつ……無いのか……!? 尻子玉……！」

カイジ猛省……恥ずかしい間違い……

「人間は古くからの盟友だからね、襲つたりしないよ！」

「そ、そうなのか……知らなかつた……！」

安堵の表情……人間の威厳ゼロ……

「そう言えば、依頼主がこれをカイジについて。」

「俺に……霖之助が……何だ……？」

それは紛れもなく … 幻想郷について書かれた本 … !
そしてその上に貼つてあるカイジへのメッセージ … !

『カイジ君へ。

君の幻想郷での生活のため、ささやかなプレゼントを用意した。
役に立つかは分からぬが、頑張ってくれ。

霖之助より』

「あつたけえ … !人の気持があつたけえよ … !」

感謝 … !! 压倒的感謝 … !!

～その夜～

「なるほど … 幻想郷にはこんなものが … !」

「ねー、お腹空かない? キュウリの浅漬けとか食べたいなー」

「分からない … !何故だ … !」

「何が?」

「何故お前は帰らないつ … !! おかしいだろ … !!」

「おかしくないよー、だつてここ、私が立てたんだもん!」

「いや … その理屈はおかしい … ! だつてここ俺ん家じやん … !!」

「そつかたいこと言わないのー。ケチは長生きしないよ?」

「そういう問題じゃないだろっ……！」

「今日だけでいいからさー油めてよーー出来栄えとかも見たいんだってー！」

「しょうがない……今日だけっ……特別サービス……！」

「やつたー！」

「おい……」とりこれ見ろこれ……！」

「何ー？？？弾幕！」じりじりやん。これがどうかした？」

「……」人に聞、妖怪対等について書いてあるな……

「書いてあるねー。」

「これ……俺でもできるのか……そこんどこ……」

「うーん。外來人は基本できないけど。能力がないとなー……

「能力……あるぞつ……俺でも……」

「えつ嘘!? 運がいいんだねえ君……」

「明日からでいい……教えてくれよ……」の弾幕つてやつのは出で方……！」

「えー……めんどくさいなあ……」

「頼むつ……」の通り……!!

「じゃあ……飽めるまで、ここに住ませてくれたらいいよ。」

「よっしゃ……ありがと……」

「この家結構気に入ってるんだよねー」

「自我自贊かよ……」

そして翌日……カイジ特訓開始……！

「まあ、手のひらに意識を集中させます」

「い、いつか……？」シコウウ……

「んづかう、上出来だよ。そしてそれを好きな方向に、飛ばすイメージを持つて。」

「い、いつ……」ヒュン…

「おめでとーーよくできましたーー！」

「やつた……使えたぞ魔法……俺にも……これで魔法少年……！」

「あとは慣れでこんな感じで連射でもーす」「ガガガガ
「えつ……いやおかしいだろ……」

「何が分からなかつた？」

「いやそうじゃなくて……慣れってなんだよ……」

「慣れは慣れだよ。」

「無理だろ……俺には一個一秒が限界……不可能……」

「……まあそこは、気持ちでカバー！」

「できるかっ……そんな事……」

「そういうえばキミの能力って？」

『『『あらゆる儲けに勝つ事ができる程度の能力』』』だったか：

「……それって何の役に立つの……？」

「知るかっ……俺に聞くな……!!」

がんばれカイジ……負けるなカイジ……
答えはもう見えてきているはず……

「……これは面白そつなネタを見つけてしまいましたね」

悪魔の取引

今まで感じなかつた苦痛‥‥！

家を持つて初めて氣づく大黒柱の苦悩‥‥！

「金がねえ‥‥！」

「お金なんて、ほとんど使えないんじゃない？」

「ファック・ユー‥‥ぶち殺すゼ!!」が‥‥！」

「!?」

「金は命より重い‥‥せこいらへんの認識を誤魔化す輩は生涯地を這
う‥‥！」

「飯はどうする‥‥飯は‥‥」

「‥‥あッ」

「そう‥‥俺は人間‥‥つまり搾取される側‥‥！」

「うーん、じゃあ人里で働いてくるしか‥‥」

「そうだな‥‥家を空ける‥‥留守番は頼んだぞ‥‥！」

「はーい」

人里にて …

「お願いしますっ ……雇つてください…」
カイジ必死の懇願 …！」

「そつは言つてもねえ……人は足りてるし……
がつ …ダメつ …！」

「ウチは間に合つてるよ
又してもダメつ …！」

「セールスお断りつて書いてあんだけうが!
何度やつてもダメつ …!!

屈辱 ……圧倒的屈辱 …!!

(クソッ …何でだ …!! なぜ俺はいつもこう上手くいかない
… !)

「ただいま …」

「おかえりー！カイジ！野菜を見つけたよ！よかつたね！」

「本当かっ …見せろよ …！」

が …種つ ……誰でも簡単お野菜の種 ……自家栽培用 …

「お前 …ふざけるのもいい加減に …」「カイジせーーーん！」
!?

「カイジせーん！ いますかー！」

「はい ……今出ます …！」

「はじめましてー！私、こうつものです！」

「新聞記者 … 射命丸文 … !?」

「以後お見知り置きー！」

「セールスなら結構です … ウチ今お金無いんで …
最強のセールス撃退 … !」

「逆ですよ！逆！」

「え … ?」

「カイジさん！新聞のネタになつて頂けませんか!? 勿論無料とは言いません！」

「えつ … ?ええつ … ?た、立ち話も何なので中へどうぞ … 」

「カイジ … 安易にセールスを連れ込んだダメだよ？」

「あややや。失礼ですね？私はスカウトしにきただけですよ？」

「まあいい … それでネタつて … ?」

「はい！我が文々。新聞は深刻なネタ不足に陥つていましてね … 」

「はい！」

「そこで！外からカイジさんが颯爽と現れ！何と家を持ったー…さらに

は同居の恋人も！」

「だだだだだ誰が恋人だ！」バンバン

「落ち着け……」

「ですがこの件はいつもの様に勝手に記事にすると色々な所から怒られちゃうんで……」うして承認に来たんです

「はい」

「森に家を持つた外来人として号外で売り出せば商売繁盛！大勝利！つて訳ですよ！」

「成程……」

「カイジ！チャンスだよ！これで有名になつて……」

「いや待て……疑問がある」

「そう……確かにこれは美味しい話……
だが美味しい話には何かがある……美しいバラにトゲがあるかの様に……！」

「それ故こちらのメリットは最大限まで引き上げなければならぬい……！」

「ギャラはいくらだ……？場合によつちやその話……ハネるぞ……！」

「!?」

「なかなか商売上手なんですねえ、で、何がこ希望です？」

「もちろん食べ物……霖之助からの食料もそろそろ底を突く……

！」

「何これ……」

にとり啞然つ……！

カイジと新聞セールスの……血を血で洗う悪魔の取引……！

「そうですねえ……では山で取れる山菜……一ヶ月分でどうでしょう？」

「ええ!? 一ヶ月分も!? きゅうつりは!?」

「勿論ありますよ。極上なのがね……」

文、悪魔の微笑み……！

「か、カイジ……いくしかない！ いくしかないよこれ！」

にとり大歓喜……！ だがカイジは冷静……！

（確かにこれは多い……俺も一週間分程度だと思つていた……）

（だがあの余裕の表情……なにか裏がある……!!）

（予想するに……山菜の在庫は随分余裕……更に外来人は珍しい故に大きな話題になる……）

その時カイジに電流走る……！

（いや……これは危険……！ 大変危険な賭け……下手すりや餓死……）
（だが分かる……長年のギャンブル歴がいけると言つてはいる……）
（……引きずり出してやる、その『保険』……!!）

「一年分 …」

「え?」

「一年分だつ ……それ以下は呑まんつ …!!」

山菜一年分 ……ビリヤの番組かと思つほど量 …
当然呑まなければこの話はお流れ …

「ちよつカイジ!? 何それ!? 考え直そつ! 流石に無理だ!」
当然阻止することり ……だが文は …

「そう来ましたか」

「どうなんだ ……答え ……」

「もう少し低くしてくれませんかね?」

「無理つ ……受け付けない ……」

「… …本当に、譲りませんね?」

「絶対 ……」

「こりは思つていた … !

これは無理 … …絶対に無理 … ! もうつりはサコナア …
確信していた … だが答えは意外 …

「わかりました … …負けましたよ。約束します

「え … …?」

「やつたつ … やつたぞつ … 大当たり … 神よ … 僕を祝福
しろっ … !」

まさに理想つ … ! 理想的つ … !

実はこの勝負 … カイジは勝つべくして勝った …
だがにとりはそれが所謂奇跡だと … 天狗の気まぐれだと思つて
いた … !

「ではこの記事は大っぴらに書かせて頂きますねー セヨーならー !!」

飛び去る文 … ! だがにとりは未だに畠然 … !

「納得行かない表情じや あないか … !」

「だつて ! そんなの変だ ! 一年分なんて狂つてるよ !」

「変でいいんだ … ! 変でなきや 悪魔は殺せないつ … ! 狂つてこそ
開かれる … ! 勝利の道が … !」

翌日 … カイジ宅前には大量の段ボールと … 一枚の新聞が置い
てあつた …